

# アメリカ公民権運動における黒人女性

## ——セプティマ・クラークの闘いと心の叫び——

藤 村 好 美

Septima Clark and the Civil Rights Movement :  
the Soul of a Black Woman

Yoshimi FUJIMURA

### はじめに

アメリカでは、1950年代から1960年代にかけて公民権運動が展開し、1964年には、公共の場における人種差別や公立学校における人種分離を禁止し雇用の場における平等な制度を整備する公民権法が、続く1965年には、人種による投票権の剝奪を違法とする投票権法が成立する。

1954年のブラウン対トピーカ教育委員会裁判の連邦最高裁判決から1963年のワシントン大行進、さらに1964年公民権法の成立を経て、1968年にマーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, Jr.) 牧師が暗殺されるまでの公民権運動史の中で、キングは運動の象徴的存在として常に光彩を放っている。しかしその歴史を振り返ると、キングが議長を務めた南部キリスト教指導者会議 (Southern Christian Leadership Conference、以下 SCLC) 以外にも、全国黒人地位向上協会 (National Association for the Advancement for Colored People、以下 NAACP) を始め、学生非暴力調整委員会 (Student Non-violent Coordinating Committee、以下 SNCC)、人種平等会議 (Congress of Racial Equality、以下 CORE) など、人種差別撤廃のための非暴力直接闘争の一端を担った組織は多く存在する。さらに運動に寄与した人物としては、キング以外にもサーグッド・マーシャル (Thurgood Marshall)、ロイ・ウィルキンズ (Roy Wilkins)、ジョン・ルイス (John Lewis)、ジェームズ・ファーマー (James Farmer)、エドガー・ニクソン (Edgar D. Nixon)、ジェシー・ジャクソン (Jesse L. Jackson)、アンドリュー・ヤング (Andrew J. Young)、エラ・ベイカー (Ella J. Baker)、ローザ・パークス (Rosa Parks)、セプティマ・クラーク (Septima P. Clark)、ファニー・ルー・ファーマー (Fannie Lou Farmer) など、多くの名前を挙げることができる。にもかかわらず、その誕生日が連邦の公共の休日とされるなど、キングが公民権運動の象徴的存在とされるのは、巧みな演説、多くの出版物、各地に出かけ行進の先頭を歩む行動力、マス・メディアの巧みな利用など、様々な要因が考えられるが、そのキングという光の陰に、多くの黒人女性が運動に果たした役割が隠れてしまっていることも事実である。

公民権運動における女性としては、わが国では、バス・ボイコット運動のきっかけとなったローザ・パークスの名前はよく知られており、そのエピソードは日本の小学校の道徳の教科書や中学校の英語の教科書でも紹介されている。筆者も、彼女とハイランダー・フォークスクール (Highlander Folk School、以下 HFS) の関わりについては、たびたび紹介してきた<sup>1</sup>。しかし、HFS のワークショップにおいてパークスに多大な影響を与え、公民権運動の背骨ともいえる投票権の獲得のための教育に尽力し、「公民権運動の皇太后 (Queen Mother of the Civil Rights Movement)」とまで呼ばれているセプティマ・クラークについては、わが国ではほとんど言及されてこなかった。一方、アメリカにおいては、黒人女性の解放の視点から公民権運動に関わった女性 (黒人、白人を問わず)

に焦点を当てて歴史を掘り起こす作業が続けられており、クラークやベイカーが黒人であり女性であるという二重の差別構造の中で、闘い苦悩した姿を追求した研究の蓄積も多い<sup>2</sup>。

筆者はこれまで、クラークが中心となって展開した黒人のための識字・政治教育実践（HFSのシチズンシップ教育プログラム）と黒人投票権獲得のための運動について言及してきたが、そこでは主に、HFSとクラークとの関わりや、参加型教育といった民衆教育の方法論を中心に論じ、クラークが、男性中心の公民権運動組織の中で、女性であり黒人であるという二重の抑圧にどのように立ち向かい苦悩したか、彼女の心の声に十分に耳を傾けて来なかった<sup>3</sup>。本稿では、クラークを成人の識字・政治教育に駆り立てたものは何であったのかを、彼女の生い立ちを中心に探ると共に、カリスマ的指導者であったキングや男性中心の公民権運動組織との関わりの中での彼女の苦悩とジレンマについて、運動の最中と晩年という異なる時期にかかれた彼女の2冊の回想録(*Echo in my soul*と*Ready from within*)<sup>4</sup>をたぐり寄せながら、追求していきたい。

## 1 公民権運動の前史—南北戦争後の再建期とその後のアメリカ南部社会の状況—

クラークは、1898年、サウス・カロライナ州チャールストンに生まれ、同州ヘンリエッタ・ストリートで少女期を過ごした。彼女の生い立ちや彼女と公民権運動との関わりは後の章に譲ることとし、本章では、19世紀後半から20世紀前半にかけてのアメリカ南部社会とそこでの黒人の境遇について概観することで、公民権運動の前史をひもといていきたい。

周知の通り、アメリカにおける奴隷の解放は、1862～1863年のエイブラハム・リンカン(Abraham Lincoln)大統領による奴隷解放宣言により実現したわけであるが、それをはさんで繰り広げられたアメリカ国土を二分した南北戦争とその後の連邦政府による北部の再建、さらに再建期後の南部社会の状況はまさに混乱そのものであった。1860年、共和党のリンカンが第16代大統領に選出されると、南部諸州では1861年3月の彼の大統領就任を待たずに、連邦から脱退して独自の政府を樹立するという動きが表面化する。当時のアメリカ社会は、急速に産業化する北部と農本主義で奴隷制度に頼る南部という事実上二つの異なる国家から成り立っていた<sup>5</sup>。1861年4月には、さきにアメリカ南部連合を結成したサウス・カロライナ、フロリダ、ジョージア、アラバマ、ミシシッピ、ルイジアナ、テキサスの諸州に加え、ノースカロライナ、ヴァージニア、テネシー、アーカンソーの諸州も連邦を脱退し、アメリカ南部連合11州は、ジェファソン・デイヴィス(Jefferson Davis)を大統領として選出し、奴隷制の正当性をうたった独自の憲法を発布する(アメリカ南部11州については、図1を参照されたい)。1861年、南軍の砲撃により南北戦争が勃発し、以後4年にわたった戦争で、両軍あわせて約60万人もの多数の死者を出すこととなる<sup>6</sup>。1862～1863年、リンカンは奴隷解放宣言を行うが、これはこの時点で戦争の大義が国の統一から奴隷解放に変化したことを示している。1865年4月、連邦軍の勝利により南北戦争は終結するが、それからわずか5日後にリンカンは暗殺されてしまう。南部社会の再建は、17代大統領のアンドリュー・ジョンソン(Andrew Johnson)に引き継がれる。

民主党のジョンソンは南部の再建を南部白人に委ねたため共和党が過半数を占める議会は反発し、1865年から1870年にかけて、3つの合衆国憲法修正条項が立て続けに出される。すなわち、1865年の憲法修正第13条により奴隷制が廃止され、1868年の憲法修正第14条により元奴隷が市民権を獲得し、1870年の憲法修正第15条により「人種や肌の色による投票権の剥奪を違法とする」規定がされたのである。しかし南部諸州では、これに対し、いわゆる祖父条項<sup>7</sup>といわれるものなどで人種による差別を明示しない方法による投票権剥奪の方法が採用され、黒人には識字テストや投票税など、投票権を阻む多くのハードルが科せられる。



図1 アメリカ深南部

(出所： <http://aboutusajapan.usembassy.gov/gifs>、アクセス日、2009年9月27日)

さらに、南北戦争終結後の南部の黒人は、経済的にも厳しい状況に置かれていた。南部連合の敗北によりおよそ400万人の奴隷が解放されたが、彼らに対する経済的保障があったわけではなかった。ジョンソンは、南部の元プランター（大農園所有者）たちに、黒人に分配するはずの土地の多くを返却してしまう。土地を持たない者は、小作人となるしか道がなかった。小作人には二種類あり、ひとつは農耕具とラバは自前のものを所有している「シェアテナント」と呼ばれる者で、もうひとつは農耕具もラバも持たない「シェアクロッパー」<sup>8</sup>とされる者であったが、当然黒人の多くは、シェアクロッパーにならざるを得ず、多くの場合その収穫の半分は地主に返納しなければならず、事実上彼らは土地に縛られることとなり、その過酷さは奴隷の頃と変わらないものであった。

1873年から4年間、アメリカはそれまで経験しなかったような経済恐慌に陥り、南部の農民や北部の労働者の間に反乱がおこる。1876年秋、このような混乱の中で大統領選挙が行われ、共和党の候補ヘイズと民主党の候補ティルデンの票は伯仲した。南部民主党は議会が共和党候補に有利な決定を下すことを認める見返りとして、南部に駐屯中の連邦軍の撤兵を要求する。こうして、「1877年の妥協 (compromise of 1877)」の結果、南北戦争後12年続いた再建期は終わりを遂げる<sup>9</sup>。

連邦軍が南部から撤退すると、南部社会はさらに不安定度を増した。1866年にテネシー州で最初のKKKが結成されて以来、同様の組織が南部社会に広まり、黒人に対するリンチ(私的制裁)事件が頻発していた。法的手続きを経ずに無法者を処罰することをリンチングと呼ぶが、その起源は独立革命期のヴァージニア州にさかのぼる<sup>10</sup>。バーダマンによれば、リンチは南部に特有のものではなかったが、南部の再建直後にできたジムクロウ法は超法規的な究極の手段となり、いかなる者であれ、ジムクロウの行動規範に違反すれば災難を招くことになったのである<sup>11</sup>。特に元奴隷の市民権を認めた合衆国憲法修正第14条よりも各州の州権が優先するという1883年の連邦最高裁判決以後、南部ではリンチがほぼ公然と行われるようになった。黒人女性歌手のビリー・ホリデイは、1930年代、ルイス・アレン作詞のStrange Fruit (奇妙な果実) という歌を歌って、リンチ事件を告発した。奇妙な果実とは、リンチを受けて殺された黒人の死体がポプラの木に縛りつけられて揺れている有様

なのであった。

再建期後の南部では、さらに人種隔離政策も徹底されていく。1896年に連邦最高裁がブレッシー対ファーガソン裁判において、「鉄道会社は、もし隔離した施設が平等であるならば、黒人と白人を隔離することができる」<sup>12</sup> という判決を出したことをきっかけとして、南部ばかりでなく北部や西部においても人種に基づく隔離が法制化され拡大していった。このようなジム・クロウ法は、先に述べた1954年のブラウン対トピーカ教育委員会裁判における連邦最高裁の判決によって違憲とされるまで半世紀以上も続いたのである。

## 2 セプティマ・クラークの生い立ち

### (1) 家庭と教育

前述のような差別構造を温存した南部チャールストンにセプティマ・ポインセットは生まれた。1898年のことである。1890年代、アメリカは再び経済恐慌に見舞われていた。クラーク自身、自らの生まれについて、次のように述懐する。

はるか昔を振り返り、完全なる人種隔離のもとでの生活はどのようなものだったのか、私は自分が行ってはいけない所とか自分がしてはいけないことがあるということをどのように受け入れるようになっていったかを、お話ししましょう。私は両親のことを話したい。彼らがこういったこと（人種隔離という現実）についてどのように対処し、私にどのような生き方を伝授したかということをしてす<sup>13</sup>。

クラークの父親ピーター・ポーチャー・ポインセット（Peter Porcher Poinsette）は、チャールストンに奴隷として生まれた。彼の母親は、ピーターを妊娠中にアフリカから奴隷として連れて来られたのである。父親について、クラークは次のように語っている。

父は穏やかな人でした。……父は無学でした。実際、自分の末っ子が勉強するようになるまで、字の書き方も知りませんでした。第一次大戦の時、父は初めて字の書き方を学んだのです。その時彼は、チャールストンのアメリカ当局の用務員でした。市民サービスの仕事が担当で、給料の小切手をもらうときに自分の名前をサインしなければならなかったのです。

父は本から学ぶような教育は受けなかったけれども教養のある人でした。人に対する深い愛情があり、内面からにじみ出る品格がありました。父は、自分と同じような黒人で貧しく恵まれない人たちばかりでなく、金持ちや身分の高い人に対しても愛情を注ぎました。ピーター・ポーチャー・ポインセットという名前は高貴でしょう？<sup>14</sup>

彼の農園主のジョエル・ポインセットは元駐メキシコ大使であり、チャールストンの農園ではメキシコからポインセチア（花）を輸入し栽培していたのだという。クラークは次のように、父親を思いはかる。

私は、父が子どもの頃奴隷として働いた思い出を話してくれたのを覚えています。父の仕事は、馬に乗って農園主の息子を学校まで送り迎えをすることでした。教科書を持つのは父の役目でした。白人の子どもが馬の前にまたがって手綱をひき、黒人の子どもが馬の後ろにまたがって本を運ぶのです。学校に着くと、白人の子どもは校舎の中に入って勉強しますが、黒人の子

どもの方は外で馬と一緒に学校が引けるのをじっと待つだけです。そしてふたりは、行きと同じ道を馬に乗って帰ってくるのです。私は、後に私の父となるこの黒人の子どもは、白人の子どものために持ってあげた本の中に書かれていたことを学ぶことはできなかったけれども、そこに書かれていたわくわくする事柄をいつかは知りたいと思ったに違いないと考えるのでした。父は年を取ってからようやく自分の名前を書けるようになるのですが、自分の子どもたちには教育を受けさせたいと決心したのです<sup>15</sup>。

次にクラークは、穏やかな父親に対して、母親は気性の激しい女性だったと振り返る。

……母は特に、子どもたちに対して、激しい人でした。私も感情的ではあるけれども、母ほどではありません。私はどちらかというと父親似であるし、それで良かったと思っています。

母は1872年に生まれました。母は、父も含め同世代の多くが奴隷だったのに、自分は奴隷でなく自由だったことを誇りに思っていました。いくらか本も読めました。

母はハイチ育ちです。母がどこで生まれたかは知りません。でも小さいときに母親を亡くしたと話していました。母と2人の姉妹は、ハイチで煙草作りをしている兄のところに引き取られて、結婚する年になるまでハイチに住んでいたそうです。母の姉妹の片方がセプティマという名前でした。セプティマとは7を意味し、十分という意味もあります。私は叔母の名前を取ってセプティマと名付けられましたが、私は2番目の子どもだったし、十分でもなかったのです。なぜなら私の下にあと6人も子どもが生まれたのですから<sup>16</sup>。

クラークは、当時コックであった父親は乏しい稼ぎにもかかわらず、子どもたちに教育を受けさせたいと望み、母親も同じ思いだったと述べている。

母は勇気がある人で、父と同様、子どもたちに教育を受けさせたいと望んでいました。母は白人の大家族の洗濯とアイロンがけをして1ドル25セントもらっていました。当時1ドル25セントあれば袋いっぱい食料品を買えるほどの金額です。父と母の努力のおかげで、私たち兄弟姉妹8人は全員高校まで行くことができました。そのうちひとりとは8年生まででしたが、(私を含め)ふたりは大学を修了したのです<sup>17</sup>。

セプティマは、まず5歳の時、黒人の老婦人が家庭で開く私立学校に入り、3年間学ぶ。その後彼女はいったんチャールストンの黒人用の公立学校に移るが、その環境は劣悪だった。生徒が多すぎるだけでなく、病気やシラミが蔓延していたのだという。そのため彼女はもう一度私立学校の3年生に逆戻りしている。彼女は、この時の体験が彼女が後に教師を志すきっかけとなったと述べている。教師は厳しかったが、「偉大な先生だった」。その後彼女は、メアリー・ストリート・スクール(Mary Street School)という公立黒人学校に進学して2年間学んだ後、別の公立黒人学校に転校し7年生を修了する。当時、黒人教師は公立学校の教師になることができず、黒人学校の教師も白人だった。白人教師は黒人学校で教えていることに引け目を感じているようで、時に黒人の生徒をむち打つこともあり、クラークは、そのような体験から、将来教師となって黒人学校で教えたいとの気持ちを強くする。

1912年、セプティマが7年生を修了した年、チャールストンに初めて黒人用の高校が開校する。パーク職業高校(Burke Vocational Institute)である。彼女はそこで1年学んだ後、母親の勧めもあり、私立アヴェリー師範学校(Avery Normal Institute)へと進む。1916年、彼女は12年生を修

了し、教師の上級資格を得、アヴェリーを卒業する。卒業の年、セプティマは校長からテネシー州のフィスク・カレッジ (Fisk College) への進学を勧められる。しかし当時の彼女にとって大学進学は高嶺の花であった。

父も母も私がカレッジに進学することを切望していましたが、それは不可能でした。学費が月に19ドルもかかるということが判明したのです。当時の19ドルといったら大変な金額です。アヴェリー師範学校の学費は月にわずか1.5ドルでしたが、それだって大変だったのです。いくら母が夜に日に働いて父の給料の足しにしても、子どもたちを養った上に私のカレッジの学費を捻出することなど不可能でした。母がいくらカレッジに行かせたいと望んでも、私はこの現実を知っていました。私は両親と口論となり、フィスク・カレッジに行くことに反対しました。もし状況が異なっていたら、私は喉から手が出るくらい行きたかった。でも、両親に負担をかけたくなかったのです<sup>18</sup>。

このようにクラークは、厳しい人種隔離政策が取られる当時のチャールストンで18歳まで学生生活を送り、人種的障壁と経済的障壁に悶々とする。そしてアヴェリーを卒業して教師になろうとしたとき、人種の壁は再び彼女の前に立ちはだかる。黒人はチャールストン市内の公立学校の教師となることはできなかったのである。彼女は沿岸に浮かぶジョーンズ島の公立学校に勤務することとなる。次に彼女の生い立ちに見る宗教的影響について見ていこう。

## (2) 宗教

クラークの母親はベテル・メソディスト (Bethel Methodist) 教会の熱心な信者で、洗濯とアイロンがけの仕事で得た収入の中から教会への献金を欠かすことがなかった。彼女にとって教会は必要不可欠な存在だった。一方セプティマは、母親の教会で洗礼を受けてはいたが、母親のように信仰心が厚かったわけではなかった。ところが、13歳の聖金曜日のある日、彼女は次のような“born again” (信仰を新たにすると) 体験をする。

……当時教会では、1週間にわたる説教集会がありました。私はそこに参加していましたが、ある晩特別な経験をしました。その時私は13歳でしたから、私は13歳で生まれ変わったのだと言えます。その後私は数ヶ月教会に通い、教会の活動のための訓練を受けなければなりませんでした。その訓練の期間を経て、復活祭の日、私は堅信礼を受けたのです<sup>19</sup>。

“born again” とは、キリスト教の信仰復興運動において、人が生まれ変わったように信仰を新たにすることである。アメリカではその歴史を通して周期的にリヴァイヴアル (信仰復興) が起こり、その際信者の数が急激に増加し、キリスト教会が伸張してきた。それぞれの次期は大覚醒 (Great Awakening) の時期と呼ばれ、大覚醒の後、革命や改革等の歴史的な変化が訪れると解釈されている<sup>20</sup>。クラークの生まれ育った時代は、ちょうど第三次大覚醒 (the Third Great Awakening) の時期 (1890～1920年) にあたるが、彼女は自らの宗教体験を“born again” ととらえ、その後生涯にわたり積極的に教会活動に従事するようになる。この彼女の宗教的情熱は、彼女が後に公民権運動と積極的に関わっていった原動力ともなった。

### 3 公民権運動との関わり

クラークは18歳で教師となってから89歳でその生涯を閉じるまで、NAACP<sup>21</sup>、HFS<sup>22</sup>、そしてSCLC<sup>23</sup>における活動を通して、公民権運動の基軸とも言える黒人の識字教育と政治教育に力を尽くした。ここでは、彼女の足跡をたどりながら、それぞれの公民権運動組織におけるクラークの活動の一端を紹介しよう。

#### (1) 全米黒人地位向上協会 (NAACP)

1916年、セプティマは母と隣人の女性と共にチャールストンの港に立っていた。18歳のセプティマはジョンズ島に教師として赴任するのである。ジョンズ島はチャールストンの入り江に浮かぶ島で、今日でこそ橋で本土と陸続きとなったが、当時はチャールストンからジョンズ島までは、船で8～9時間もかかった。偶然にも、セプティマの母方の祖父はジョンズ島出身のネイティブ・アメリカンだったそうである<sup>24</sup>。島の環境も赴任先の学校の環境も、劣悪を極めた。校長兼任の彼女の月給は25ドルだったが、同じ資格を持つ白人教師なら月給は85ドルだということを知り、彼女はサウス・カロライナ州では40年前と同様、差別が温存されていると嘆いた。しかも彼女の担当は、1年生から8年生までの132名の黒人生徒だった。彼らの生活は貧しく、生徒たちが農繁期に学校に来ることなどまれだった。

まもなくセプティマは、ジョンズ島の住民たちの多くが字の読み書きができないことを知る。彼らの生活は原始的で、衛生状態も悪く、公共サービスを受けることすら知らなかった。彼女は、「ジョンズ島こそ、自分と同じ恵まれない人種の貧しくて不遇な人びとを教えるという自分の小さい頃からの夢を実現する場なのだ」<sup>25</sup>と確信し、成人教育にも積極的に関わっていった。

ジョンズ島で2年間働いた後、彼女はチャールストンに戻り、母校アヴェリー師範学校で教えるようになる。1919年、NAACPを中心に、チャールストンの公立学校でも黒人教師を雇うことを求めた集会がチャールストンで開かれた。NAACPの会員となったセプティマも署名活動に参加する。初めての運動との関わりであった。

同年秋、セプティマはアヴェリー師範学校を後にし、サウス・カロライナ州の東岸にあるマックランヴィルという島の教師となる。この島で彼女は運命的な出会いをする。海兵のネリー・クラーク (Nerie Clark) である。セプティマの母親の反対を押し切り、二人は翌年結婚するが、1921年に生まれた娘は1ヶ月足らずで亡くなってしまう。その後、セプティマは夫の実家のあるノース・カロライナ州ヒッコリー、夫の新しい職場オハイオ州デイトンなどを転々とするが、1925年、夫はデイトンで病死してしまう。

1927年、セプティマは再びジョンズ島の地を踏み、教師の職に対する自らの情熱を再確認する。そしてさらに学ぶため、サウス・カロライナ州の州都コロンビアのサマースクールに通い始める。1929年には、コロンビアのブッカー・T・ワシントン高校 (Booker T. Washington High School) の校長シモンズ (Simmons) の講義を受けたことをきっかけに、シモンズからコロンビアの公立学校の教師になるように誘いを受ける。

これが、セプティマの大きな転機となった。彼女は後に、これは神の御摂理ではないか、とすら語っている<sup>26</sup>。コロンビアで、彼女は数々の大学のセミナーに参加すると共に、初めて本格的な市民運動に参画するようになる。そしてNAACPが中心となって展開していた「教師の給与均等化運動 (teachers' salaries equalization campaign)」に積極的に関わっていく。これは一部の教師の反感をも呼んだが、彼女はこれを「私に関わった初めての急進的な仕事 (my first radical job)」と位置づけている。

……私はアヴェリーにいたとき、チャールストンの公立学校に黒人の教師を採用することを求めて署名活動を行いました。そして今、私は私と同じ人種の教師のためにさらなる運動をすすめているのです。この均等化の訴訟は、ある一人の女性教師がチャールストンで始めたものです。……現在、コロンビアの教師、J・アンドリュー・シモンズ (J. Andrew Simmons) のリーダーシップのもと、別の教師を原告として闘っているのです<sup>27</sup>。(p.81)

また1937年、彼女はアトランタ大学のサマースクールで、NAACPの創設者のひとりである W・E・B・デュボイス (W.E.B. DuBois) の講義も受けており、その時のエピソードを次のように語っている。

ある日、私は授業に行くために市営バスに乗りました。私は黒人用の席である後部に席を取りました。すると赤ちゃん連れの黒人女性が電車に乗ってきました。彼女は2歳くらいの男の子も連れていましたが、男の子は電車の前の席に腰掛けるなり、こう言ったのです。「ママ、僕は子どもだからここに座ってもいいよね。」

母親はすごく落ち着かなくなり、身体を震わせました。「だめよ、後ろにいらっしゃい。」そう言って、彼女は子どもをバスの後ろに連れていったのです。

その日、デュボイスの授業があったので、わたしはバスで見たことについて彼に尋ねました。彼の答はこうでした。「そうです。子どもには後部座席にすわるように教えるべきです。黒人の子どもが他の者に劣っているわけではありません。でも、州の法律で黒人はバスの後部座席に座る決まりとなっています。でも子どもたちには、いつかこの規則が変わるときがくるということを伝えなさい。」<sup>28</sup>

1954年のブラウン対トピーカ教育委員会裁判の最高裁判決以降、南部諸州は危機意識を新たにする。1955年、サウス・カロライナ州では、州や市の職員がNAACPの会員であることを禁ずる法律を可決する。それでもクラークはNAACPを退会しなかったため、翌年、彼女は免職となってしまう。彼女はこの法律は誤りであるという信念を持っていたため、妥協しなかったのである。

## (2) ハイランダー・フォークスクール (HFS)

クラークがチャールストンの教師の職を解雇された時、彼女にHFSのスタッフとして次なる活動の場を与えたのは、HFSのマイルズ・ホートン (Myles Horton) だった。クラークはHFSとの出会いについて、次のように語っている。

ハイランダーは私にとって未知のものではありませんでした。その場所、人びと、その目的、どれもよく知っていました。1954年と1955年の2年間、私はそのワークショップのディレクターをしました。私はハイランダーの建つ、美しく心が浮き立つようなカンバーランド大地、そのスタッフ、コミュニティの人びとが大好きでした。私はその目的とプログラムに全く同感だったのです。……

長いこと、私はハイランダーとそのプログラムについては、聞いていました。でも、1952年から、私はそれに熱い関心を持つようになりました。そのいきさつはこうです。YWCAの書記長であるチャールストンのアンナ・ケリー (Anna Kelly) がワシントンで子どもと若者に関する会議に出席し、そこで彼女はハイランダーの理事長を勤めているジョージ・ミッチェル博士 (Dr. George Mitchell) にあったのです。

彼女は博士に尋ねました。「ミッチェル博士、南部に白人と黒人が一緒に会議をして答えやヒントを見つけようとする場所があるというのは本当ですか。」

博士は答えました。「はい、それはハイランダーです。」<sup>29</sup>

当時の南部で白人と黒人が時間と空間を共にすることは、およそ考えられないことであった。1で述べたように、南部でのジムクロウ法は厳然と存在していたし、それを破る者は、生命の危険を覚悟しなければならなかったのだから。そしてHFSの究極の特徴はまさに、“integration”（融合）なのであった。

ミッチェル博士の答に驚いたケリーは1953年の夏、HFSのワークショップに参加する。そしてチャールストンに戻ると、興奮と感動の余り、仲間のクラークに翌年の参加を勧めたのである。翌年、クラークはHFSに出かけ、9日間にわたる宿泊型ワークショップに参加する。テーマは、「公立学校の隔離政策に対抗するためのガイド」と「ワークショップとは何か」というものだった。ワークショップを終えたクラークはチャールストンに戻るとすぐに、HFSにならってカウンティ内のPTAを取り込んだ1日のワークショップを展開し、家族、宗教、健康、音楽について語り合う。彼女はその際、HFSのホートンと妻のジルフィア（Zilpphia）をチャールストンに招いているが、クラークの行動力には脱帽する。クラークはさらに同年、2度目のHFSのワークショップに参加する。その際、彼女はホートンの勧めもあり、ジョンズ島の彼女の教え子だったエサウ・ジェンキンズ（Esau Jenkins）を連れて行く。エサウこそが、HFSのシチズンシップ・スクール・プログラム（識字教育と政治教育のプログラム）のきっかけを作った人物なのであった<sup>30</sup>。

ここで暦を1956年に移そう。ホートンの提案を受け入れたクラークは、HFSでスタッフとして活動するようになる。クラークは、ジェンキンズからジョンズ島の人びとが文字の読み書きができず、困っているという話を聞き、自らの40年前の体験を思い出す。ジョンズ島はあのときとほとんど変わっていないのである。彼らの切実な声に耳を傾けて、ホートンは、HFSが学級を開く必要性を悟る。クラークとジェンキンズを中心に、計画が練られた。ジョンズ島の古い校舎を改造して、成人学校の場所を確保し、クラークの従妹で美容師のバーニス・ロビンソン（Bernis Robinson）に識字学級の教師役を頼むこととした。こうして、1957年、ジョンズ島でのシチズンシップ・スクールが始まったのである。

シチズンシップ・スクールでは単純な文字の読み書きだけではなく、学習者（黒人）が当時の有権者登録試験に対応できるだけの力をつけることを目標として学習が展開した。

有権者登録の人数は着実に増えていった。そして評判を聞きつけて、ジョンズ島の周辺の住民も、同様の学習を切望するようになっていった。さらに教師が必要となった。教師の条件は、文字の読み書きができる黒人であること、そして公立学校の教師ではないこと、生徒を集めることができることだった。そして教師の学習センターがHFSに設置された<sup>31</sup>。シチズンシップ・スクールはチャールストン周辺からサウス・カロライナ州、ジョージア州、さらに南部諸州に広がっていった。クラークは、シチズンシップ・スクールのプログラムづくりの責任者として奔走し、南部各地を駆け回った。

シチズンシップ・スクールが成功して有権者登録をする黒人が増えることは、しかし、南部白人社会にとってはありがたいことではなかった。HFSは共産主義者の学校だと中傷されるようになる。そしてHFSと公民権運動の関わりが明らかとなってくるにつれ、HFSへの締め付けは厳しくなっていった。ホートンがHFSを留守にしていた1959年7月の夜、HFSは突然強制捜査を受け、クラークを含む4名が逮捕されてしまう。容疑は、ウィスキーの所持と密造酒の製造というものだったが、これは全くの冤罪だった。クラークが1961年に書いた回想録は、その時の衝撃の模様が

ら始まっている<sup>32</sup>。

HFS が強制捜査を受けたことで、HFS はもとより、シチズンシップ・スクールの運命も危ぶまれた。クラークの友人である公民権運動の活動家、エラ・ベイカー (Ella Baker) は、キングと SCLC に対し、シチズンシップ・スクール・プログラムを SCLC に引き継ぐよう働きかける。キングとホートンは話し合いを続け、クラークは HFS から SCLC へと移って活動を続けることとなる。

1959年7月のハイランダーへの強制捜査の後、キング博士とマイルズ・ホートンが会って、私たちが計画して作ってきたプログラムを続けていくことができるか協議しました。そして彼らが達した結論は、続けることができるというものでした。アンディ・ヤングがニューヨークのキリスト合同教会 (United Church of Christ) から SCLC に派遣されて来ました。南部に識字教育を行う場をつくることで合意ができたのです。それから、マーシャル・フィールド財団の基金が SCLC に移されることも決定しました。キング博士は私に、基金と共に SCLC に移ってほしいとおっしゃいました<sup>33</sup>。

彼女の心は張り裂けんばかりであった。HFS が民衆学校としてのチャーターを取り消され、全財産を没収されてしまうのである。しかし、HFS は1961年に閉校となった後、テネシー州ノックスビル (後にさらにニュー・マーケットへと移転し、現在に至る) の地で、ハイランダー研究教育センターとして生まれ変わるものである<sup>34</sup>。

### (3) 南部キリスト教指導者会議 (SCLC)

前述の通り、HFS のシチズンシップ・スクール・プログラムはクラークと共に SCLC に引き継がれる。以後、クラークは、SCLC のスタッフとしてシチズンシップ・スクール・プログラムの普及と黒人有権者登録の拡大のために南部諸州を奔走する。ところでクラークによれば、彼女と SCLC の関係は次のようなものであった。

SCLC は私に直接給与を払ったわけではありません。SCLC は法人として財団から直接基金を受けることができないカテゴリーに入っていました。そこで私はニューヨークのキリスト合同教会を通して、SCLC の活動を行ったのです。教会の仕事をしていたアンドリュー・ヤングが取りはからってくれました。ですから正確には、(マーシャル・フィールド財団の) 基金は教会に入って、教会が私に報酬を払ったのです<sup>35</sup>。

彼らはまずシチズンシップ・スクール・プログラムの拠点作りから始めなければならなかった。ヤングの尽力で、ジョージア州リパティ・カウンティにあるキリスト合同教会のセンターを借りることができた。彼らはそれを、ドーチェスター協同コミュニティ・センター (the Dorchester Cooperative Community Center) と名付けた。そこを拠点に、シチズンシップ・スクール・プログラムの計画から運営まで、クラーク、ヤング、そして SCLC のメンバーである歌手、ドロシー・コットン (Dorothy Cotton) の3名が協力して行った。

SCLC の私たち3名は、ドーチェスター・センターに来る人たちを集めようと南部中を車でまわりました。アンディ・ヤングが管理責任者、ドロシー・コットンが教育コンサルタントの責任者、そして私が教師教育担当の主任でした。私たちは3人でチームを組み、南部のあらゆる所から人びとをバスに乗せて運んでくるのでした。時には70名もの人たちをです。彼らはドー

チェスター・センターで5日間の宿泊型の教室に参加するのでした<sup>36</sup>。

有権者登録による黒人の権利獲得の運動は、SCLCのみならず他の公民権運動にも波及した。1962年には、投票者教育プロジェクト（Voter Education Project）が正式に発足し、SCLC、SNCC、CORE、都市連合（Urban League）、NAACPの5つの組織がそれぞれプログラムを展開するようになった。クラークは語る。

1962年までには、主要な公民権運動組織が有権者登録に関する何らかの活動をする準備ができました。でも、私たちはそれより以前に、1957年から1961年まで、シチズンシップ・スクールの構想を発展させてきたのです。すべての公民権運動組織が私たちと同様の手法を取ることが可能です。なぜならそれが有効であることはすでに証明済みだからです。

1962年、SCLCはCORE、NAACP、都市連合、SNCCの4組織と連携を組み、投票者教育プロジェクトを立ち上げました。続く4年間で、全体で1万人のシチズンシップ・スクールの教師を養成しました。そして、南部でおよそ70万人の黒人有権者が登録を済ませたのです。1970年までに、少なくともさらに100万人の黒人が有権者登録を行いました。しかし、深南部から2人の黒人を連邦議会に送ることができたのは、再建期以降1972年になって初めてのことでした。すなわち、一人はシチズンシップ・スクールの設置にあたって常に私を助けてくれたアンドリュー・ヤング、もう一人はテキサス州のバーバラ・ジョーダン（Barbara Jordan）でした<sup>37</sup>。

クラークは1970年6月、SCLCを正式に引退する。SCLCが開いた引退記念パーティの席で、彼女は、「今、ようやく、私たちは同じ空気を共に吸うことができるようになった」と述べた。彼女はその後、チャールストンの教育委員を務め、インタビューに答え、執筆活動を行い、1987年12月、その89年の生涯を閉じるまで、積極的に社会に発信し続けたのである。

#### 4 黒人男性指導者との確執

セプティマの生涯を振り返ると、1920年に母親の反対を押し切って結婚したネリー・クラークとの生活は幸福なものではなかった。ふたりの間に生まれた長女のヴィクトリアはわずか23日で他界してしまい、セプティマはこの出来事を、母親に逆らった天罰だととらえる。そして1924年に長男ネリーをデイトンの病院で出産したセプティマは、夫が以前他の女性と離婚した経験を持ち、その上デイトンでは別の女性と暮らしているという衝撃的な事実を知る。退院したセプティマに夫ネリーはデイトンを立ち去るように促す。そしてその夫は、翌年には腎臓を患って亡くなってしまう<sup>38</sup>。

夫をなくしたセプティマは、幼い息子を夫の両親に預け、教師として働き、かつNAACPでの活動が続けながら、1942年にはコロンビアのベネディクト・カレッジ（Benedict College）で念願の学士号を、さらに1947年にはヴァージニア州のハンプトン大学（Hampton Institute）で修士号を取得している。彼女は飽くなき向学心と社会正義への情熱に駆り立てられていたのかもしれない。

そのような彼女にとって、HFSでの6年間は、闘争ではなく心穏やかな闘いの期間だったのではあるまいか。*Echo in my soul*を読むと、閉校を余儀なくされたHFSへの愛惜の情がひしひしと伝わってくる。激動の公民権運動に関わりながらも、セプティマは、肩の力を抜いた幸福な時間をHFSで送ることができたのではなかろうか。それは、HFSの創設者マイルズ・ホートンと妻シルフィアの暖かさと、達成感のある社会活動、仲間との歌や語りによって醸し出されたものに相違

ない。筆者は HFS の後身であるハイランダー研究教育センターをたびたび訪れたが、そこには、多くの人を包み込む暖かい空気が流れていたことを思い出す。

セプティマにとって、HFS を離れることは衝撃的なことであった。シチズンシップ・スクール・プログラムを存続させるために、彼女は SCLC へと移籍する。その際のいきさつを読むと、キングとホートンの間の折衝とか、エラ・ベイカーの主張といった記述は見られるが、セプティマがどのように考えたかは書かれていない。いや考える余地などなかったのであろう。どのような形であれ、プログラムを続けて有権者登録者の数を増やしていくことで彼女の頭はいっぱいだったのだから。

HFS から SCLC に活動の場を移した彼女にとって、その環境は厳しいものとなった。*Echo in my soul* には、彼女は SCLC においても HFS 時代と同様、楽しく活動が続けることができているといった記述があるが、その18年後にされたインタビューの記録である *Ready from within* を読むと、SCLC やキング始め黒人男性指導者に対する痛烈な批判がうかがえる。あまりの論調の差に、同じ人物が書いたものかと目を疑うほどである。この違いはどこからきているのであろうか。18年の間に彼女の考え方にどのような変化が起こったのだろうか。本稿を閉じるにあたり、考える必要がある。

*Ready from within* の聞き手であるシンシア・S・ブラウン (Synthis S. Brown) は、1979年のクラークの回想にはフェミニストの視点が多く見られると指摘する<sup>39</sup>。クラークは、1968年、ヴァージニア・ダー (Virginia Durr、アラバマ州の弁護士、クリフォード・ダーの妻) の勧めで全米女性機構 (National Women's Organization、以下 NOW) の会員となり、その後、性差別に関して批判的な姿勢を取るようになったという。以下、*Ready from within* から、クラークが SCLC の活動の中でキングやその他の男性活動家らの言動をどのように捉えているかを見ていこう。

まず彼女は、次のように、SCLC の男性理事たちが彼女が SCLC の理事であることに対して批判的だったと指摘する。

私は SCLC の理事だったのですが、男性は私の言うことにはあまり耳を傾けてくれませんでした。彼らは、私が出かけると他の人びとが聞いてくれるので、私を色々な場所に派遣しました。しかし、理事の男性は女性のことは全く信用していなかったのです。彼らは、女性なんていうものはセックス・シンボルに過ぎず何の貢献もできないと思っていました。ですから、アバナシー牧師 (Rev. Abernathy) は、「なぜクラークさんがこのスタッフに名を連ねているのかね」と繰り返し尋ねるのでした<sup>40</sup>。

SCLC は、その名が示すとおり、教会の牧師を中心とした組織であったため、当然、主要な会員は男性で占められていた。この点、男性中心と言われながらも早くから女性の支部会長を掲げていた NAACP よりもさらに男性中心主義が徹底していた。クラークはさらに、キングにしても、シチズンシップ・スクール・プログラムにおける彼女の功績を認めながらも、クラークに対する接し方など、彼の言動には女性軽視の姿勢があったと述べている。彼女は、そのような批判的視点でキングを見る自分を分析し、次のように述べる。

当時、私はキング博士を批判することなど、決してしませんでした。ただ、彼が常に行進の先頭に立つ必要はないのでは、と話したことはありましたが。私は彼のことを尊敬していました。私は彼の勇気や他人を思いやる態度、非暴力主義を尊敬していました。私が今キング博士のことを批判的に捉えるのは、私が女性解放運動の経験を持ったからかもしれません。もちろん当時は、黒人教会では男性が中心だったし、それが当然だったのです<sup>41</sup>。

クラークは、問題はキング個人ではなく、SCLC 全体に女性軽視の考え方があったことであり、それは公民権運動の弱点であったと、次のようなエピソードを披露する。

1965年、私たちがパサディナに行った時のことです。ミセス・キングはとても素晴らしい歌手ですから、その時もコンサートをされる予定でした。でも彼女は歌うのをあきらめようとしたのです。なぜなら、男性たちがそれを望まなかったからです<sup>42</sup>。

クラークは、黒人であり女性であるという二重の差別構造の中で、黒人女性は公民権運動に大きな貢献をしたにもかかわらず、見過ごされてきたのではないかと声を大にする。

バスボイコット運動の組織化の際、モンゴメリーの女性たちは、単に手伝ったのではなく、主要な役割を果たしたのです。黒人女性は、教会のグループとかアラバマ州立大学で始まった女性政治評議会（Women's Political Council、以下 WPU）の活動を通してバスボイコット運動に力を貸したのです。女性は、自分たちが抗議行動を支持すれば男性はきっとついてくると信じていました。男性は抗議行動の先頭には立てません。彼らは（職業や地位など）失うものが多すぎますから<sup>43</sup>。

失うものがない者の持つ強さは、社会を変える原動力となる。私たちは社会変革に果たす女性の役割を見過ごしてはならない。クラークの心の叫びは、私たちにそれを訴えかけているのだといえよう。

- 1 藤村好美 「ハイランダー・フォークスクールにおける変容的学習の展開—ローザ・パークスに見る社会変革への学びについての考察—」 広島大学大学院教育学研究科教育学教室『教育科学』第26号、2006、108-135。
- 2 Vicki L.Crawford, Jacqueline Anne Rouse, & Barbara Woods, eds., *Women in the Civil Rights Movement: Trailblazers & Torchbearers 1941-1965*, Bloomington & Indianapolis, Indiana University Press, 1993., Aldon D. Morris, *the Origins of the Civil Rights Movement: Black Communities Organizing for Change*, New York, the Free Press, 1986.
- 3 藤村好美 「ハイランダー市民権学校プログラムの公民権運動との係わり—セプティマ・クラークの実践を中心に—」 紀尾井生涯学習研究会『生涯学習フォーラム』第5巻 第1・2合併号、2002、54-66。
- 4 Septima Poinsette Clark with LeGette Blythe, *Echo in my soul*, New York, E.P. Dutton & Co., Inc., 1962, Cynthia Stokes Brown ed., *Ready from within: Septima Clark and the civil rights movement*, Trenton, Wild Trees Press Inc., 1990.
- 5 Sean Wilentz, "Society, Politics, and the Market Revolution; 1815-1848" in Eric Foner ed., *the New American History*, Philadelphia, Temple University Press, 1990, 51-71.
- 6 Howard Zinn, *A People's History of the United States: 1492-Present*, New York, Harper Collins Publishers, 2001, 192.
- 7 祖父条項 (grandfather clause) とは、その祖先が1868年以前に選挙権を持たない者には識字テストを課すといった投票規制であり、事実上、黒人の選挙権に制限を与えるものであった。  
(<http://aboutusa.japan.usembassy.gov/e/jusa-outline-government08.html> 2009/09/13)
- 8 シェアクロッパーとは、苛酷な小作制度により、隷属的な立場に置かれた小作人であり、南北戦争後、多くの黒人がこの状況におかれた。
- 9 Howard Zinn, *A People's History of the United States: 1492-Present*, New York, Harper Collins

- Publishers, 2001, 205-206.
- 10 松村 昶・富田虎男編著『英米史事典』研究社、1999、159-160.
  - 11 ジェームズ・M・バーダマン『黒人差別とアメリカ公民権運動』集英社、2007.
  - 12 Howard Zinn, *A People's History of the United States: 1492-Present*, New York, Harper Collins Publishers, 2001.
  - 13 Cynthia Stokes Brown ed., *Ready from within: Septima Clark and the Civil Rights Movement*, Trenton, 1990, 87.
  - 14 Septima Poinsette Clark with LeGette Blythe, *Echo in My Soul*, New York, E.O.Dutton & Co., Inc., 1962, 13.
  - 15 *Ibid.*, 15.
  - 16 *Ibid.*, 14.
  - 17 *Ibid.*, 16.
  - 18 Cynthia Stokes Brown ed., *Ready from within: Septima Clark and the Civil Rights Movement*, Trenton, 1990, 102.
  - 19 *Ibid.*, 97.
  - 20 ジェームズ・M・バーダマン『黒人差別とアメリカ公民権運動』集英社、2007、20-23.
  - 21 NAACP(全米黒人地位向上協会)は、1909年、デュボイス、ウェルズらによって創設された黒人に対する差別の撤廃を求めて、主に法的解決を求める運動を展開する組織である。
  - 22 HFS(ハイランダー・フォークスクール)は、1932年、マイルズ・ホートンらによってテネシー州モンティエグルに設立された民衆学校である。1950年代から1960年代の活動は公民権運動の基軸ともなった。
  - 23 SCLC(南部キリスト教指導者会議)は、モントゴメリーバスボイコット運動をきっかけに1957年に創設されたキリスト教牧師を中心として非暴力直接行動の戦略を取る公民権運動組織である。初代会長はマーティン・ルーサー・キング・ジュニア。
  - 24 Cynthia Stokes Brown ed., *Ready from within: Septima Clark and the civil rights movement*, Trenton, Wild Trees Press, Inc., 1990, 89.
  - 25 Septima Poinsette Clark with LeGette Blythe, *Echo in my soul*, New York, E.O.Dutton & Co., Inc., 1962, 52.
  - 26 *Ibid.*, 76.
  - 27 *Ibid.*, 81.
  - 28 *Ibid.*, 116.
  - 29 *Ibid.*, 119.
  - 30 藤村好美「Highlander Folk Schoolにおける成人教育の展開—Citizenship School Programを中心に—」東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育研究室『生涯学習・社会教育学研究』第20号、1996、51-60.
  - 31 Aldon D. Morris, *The Origins of the Civil Rights Movement: Black Communities Organizing for Change*, New York, the Free Press, 1986, 156.
  - 32 Septima Poinsette Clark with LeGette Blythe, *Echo in My Soul*, New York, E.O.Dutton & Co., Inc., 1962, 3-10.
  - 33 Cynthia Stokes Brown ed., *Ready from within: Septima Clark and the Civil Rights Movement*, Trenton, Wild Trees Press, Inc., 1990, 61.
  - 34 藤村好美「ハイランダー市民権学校プログラムの公民権運動との係わり—セプティマ・クラークの実践を中心に—」紀尾井生涯学習研究会『生涯学習フォーラム』第5巻第1・2合併号、2002.
  - 35 Cynthia Stokes Brown ed., *Ready from within: Septima Clark and the Civil Rights Movement*, Trenton, Wild Trees Press, Inc., 1990, 62.
  - 36 *Ibid.*, 63.
  - 37 *Ibid.*, 70.
  - 38 *Ibid.*, 113.